

Episode1

そのお母さんは一瞬かたまり、口をあんぐりとしていた。ものすごく戸惑っている様子だ。こんな人に我が子を任せていいのか？ という迷いが顔に滲み出ていた。

私は玄関に立って笑顔で挨拶をしたのだ。今日は新しく受け持つ生徒さんの面接の日だった。
お だ は る と
た。小田悠人君、十四歳、中学二年生だった。

私が小田家を訪ねて来て、すぐに母親が出てきた。その母は私を男だと思っていたらしい。しかし訪ねてきたのは若い女の子だった。それでびっくりしているのだ。

知り合いのついでで家庭教師をお願いされたのだが、その時は私の本名、つまり男名前が話が伝わったようだ。それは普通なのだが、実は女装男子だったというわけだ。しかも自分で言うのも何だが、パス度の高い女装男子だ。

女装したまま女子トイレに入っても全く違和感がなく、疑いの目で見られたことは一度もなかった。それで私はすっかり自信を持ってしまったのだ。

「あ、あの、男性だって聞いていたんですけど……」

悠人君のお母さんは言った。私の本名は堺圭祐、二十四歳。その名前を聞いたら、男性だと思うのも無理はない。悠人君のお母さんは私が女装子だということまでは聞いていないのだ。

「はい、堺です。本名は堺圭祐ですが、今は美並^{みなみ}サキです。美並サギじゃありませんよ。サキです。よろしくお願いします」

私はいつものジョークを言ってお母さんを和ませた。バッグの中から名刺を出してお母さんに渡した。そこには女装名で「美並サキ」と書いている。

「お母さん、私がこんな恰好をしてるのでビックリされてますよね。その理由をこれからお話ししますから、お邪魔してもいいですか？」

「あ、あ、はい、どうぞ」

悠人君のお母さんは我に返ったようにそう言って、私にスリッパを出してくれた。家は大きい中流家庭のようだった。お母さんは私をリビングに案内してくれた。ソファに座って待っていると、お茶を淹れて私の前に置いてくれた。

「では早速ですが、なぜ私がこんな恰好をしているのかと申しますと……」

私は家庭教師を二年やっているが、最初の頃は普通に男の恰好でやっていたのだ。しかし受け持つ生徒さんが、なんだか私に馴染めず、勉強に身が入らないのだ。結果志望校には行けないというケースが多かった。

そこで私は悩んだ。どうしたら中学生の子供と打ち解けることができるのか？ 大学時代から私は女の子に変身するのが大好きで、それもかなりのクオリティの高さが自慢だったのだ。

これを生かさない手はないと思い、思い切って女装男子で生徒の前に現れたのがきっかけだった。

そうしたら生徒とも打ち解けることができ、勉強に集中することができたのだ。これはいい、と思った私は、この手でいこうと思い付き、それ以降は女装子の恰好で家庭教師をすることにしたのだ。

生徒さんからは「おもしろい先生」というイメージを持たれて、うまくいくことが多くなり、それにつれてやる気を出してくれて、勉強にも集中でき、結果志望校に合格できるという図式が出来上がったのだ。

中には志望校よりもワンランク上の学校に行ってくれた子もいる。そんな時、私は本当に嬉しくなるのだった。

「そうなんですか、そういうことなんですね」

「はい、そんなわけで私はこの恰好でいつもやらせていただいてるんです。ちゃんと東大の教育学部を出ていますのでご心配なく」

「まあ、素晴らしい学歴ですね」

お母さんはやっと微笑んでくれた。

「最初はビックリいたしました。男性の名前を聞いていたから、女の子が来たので、ええ？ と思ってしまっ」

お母さんは笑いながら言った。

「驚かせてすいません」

「でも、綺麗ですね。本当に、と言っては失礼ですが、男性ですか？」

「はい、正真正銘の男子です」

綺麗と言われるのはやはり嬉しい。「これが男モードの私です」と言って、スマホの中の自分の写真を見せた。

「あら、男性でもイケメンじゃないですか。きっとおモテになるんでしょう？」

「いえ、私なんてぜんぜん」

「お化粧も自分でなさるんですか？」

「はい、いろいろと勉強いたしまして、なんとかここまで」

「ホントに可愛いですね」

お母さんは相当気に入ってくれたようだった。このお母さんもなかなか綺麗だ。どう見ても三十代後半にしか見えない。

「では早速、本題に入っていきたいのですが、今の息子さんの成績はどうなんでしょうか？」

お母さんは急に表情を曇らせた。

「それが……芳しくなくて、このままだと志望校は危ないって、先日保護者会でも言われてまして、なんとかならないかと思って、お友達に相談したんです。そしたら美並先生をご紹介いただきました」

「なるほど」

だいたい家庭教師を必要とする時は、成績が芳しくない時だ。

「今日は息子さん、ご在宅でしょうか？」

「はい、ちょっと待ってください」

お母さんは席を立ちあがって二階へ上がっていった。息子の悠人君は中学二年生だと聞いている。どんなタイプの子なのだろうか？ ちょっと楽しみだった。すぐに母親の後をついてくる悠人君の姿が見えた。

リビングに入ってきた悠人君に私は立ち上がり挨拶をした。するとやっぱり悠人君はお母さんと同じようなリアクションを見せたのだ。固まったまま私の顔を凝視している。その顔が可笑しくて私は笑ってしまった。

「こちら美並サキ先生よ。悠人です。ほらご挨拶なさい」

お母さんは私と悠人君を交互に見ながら紹介した。

「あ、ああ、こんにちわ」

「美並先生はね、こんな格好だけど、男の先生よ」

「え？」

悠人君は一言言った。きっと頭の中はクエスチョンだらけだ。最初はみんな同じようなリアクションを見せる。それを順を追って説明するところから、生徒との関係が始まり、その段階でかなり打ち解けることができるのだ。

「じゃあ、あとは悠人君といろいろお話していきますので、お部屋の方に……」

「わかりました」

私と悠人君は二階へ上がって、彼の部屋に入った。勉強机とベッドが置いてある中学生らしい部屋だった。

壁には本棚が置いてあって、その下の段に百科事典が並んでいる。もちろん飾りだろう。こんな難しい本を中学生が読むはずもないし、興味もないだろう。親が必要だと思って買い与えるのだ。ほとんど重しにしか使われない。

上の方には漫画本や趣味の本が並べてある。人によって多少の違いはあるが、だいたいこんな感じだ。

悠人君の机の前にはパイプ椅子が一脚置かれていて、それが私の椅子だとすぐに分かった。悠人君には自分の椅子に座ってもらい、私はそのパイプ椅子に座って、早速話を始める。

まずはなぜこんな恰好をしているかの説明をする。先ほどお母さんに話したことと同じ話をするのだが、悠人君に対しては、少し話を面白くして語るのだ。

初対面で見た第一印象では、大人しそうな感じを受けた。世代の違う相手を前にすると、消極的になる子が多い。どんなテンションで接していいかわからないからだ。まずはその壁を取り払うことが大事だった。

初めからテンションの高い子もいる。私と同じテンションで接してくれて、わりとバカ騒ぎしてくれる子だとやりやすい。きっと悠人君はその中間ぐらいだろうと思えた。少し水を向ければ、すぐに本来の個性を出してくれる子だ。

「悠人君の好きな学科はなに？」

「特にない。全部苦手」

私は笑った。なかなかいい答えだ。

「そっか、正直でいいわね。そうそう先月中間テストあったでしょ。見せてくれる？」

「え？ 全部？」

「五教科だけでいいから」

「それ一番見られたくないんだけど……」

そう言いながらも悠人君は引き出しの中から、テストの答案用紙を出してくれた。教科は英語、数学、国語、理科(一、二分野)、社会(一、二年で歴史・地理 三年で公民)だ。その結果を見たら、お母さんが心配するのも無理ないと思った。英語は六十五点、数学四十九点、国語は六十点と主要な教科は惨憺たるものだ。

「ふーん、こんな感じね。わかった」

だいたい成績のいい子はいない。こんな点数も見慣れている。この数字をこれから上げていくのだ。

「大丈夫、これなら何とかなるから」

まずは安心させた。そして今日は勉強はせずに、雑談をするのだ。部活の話とか、趣味の話。悠人君にこれといった趣味はなかった。もっぱら流行りを追いかけたり、ゲームに明け暮れる毎日だった。部活は帰宅部だが、勉強するにはその方がいい。時間がいっぱいある。

「先生って、なんかホントに女みたいですね」

「そう？ ありがとう。綺麗でしょ？」

「自分で言う？ でも綺麗だけど」

「悠人君もやってみる？ 女装。楽しいよ」

「いえ、遠慮します」

「あら、残念。可愛くなると思ったのにな」

中学生ならまだ男性化が進んでないので、女装すれば可愛くなるはずだ。

私は脚を組んで座っている。意識しなくても自然にそうなるのだ。別に悠人君を誘惑しようと思っているわけではない。

「ねえねえ、悠人君は好きな子とかいるの？」

私は頬杖をついて悠人君を見た。

「うーん、クラスに可愛い子はいるけど、彼女じゃないです」

「ええ？ どんな子どんな子？ 写真とかないの？」